



© 3003 film production, 2019

杜人

環境再生医
矢野智徳の挑戦

ナウシカのような人に 出逢った。

人間よりも自然に従う風変わりな「医者」
3年間の格闘と再生の記録

[2022年/日本/101分] 出演：矢野智徳 監督・撮影・編集：前田せつ子



造園家で環境再生医でもある矢野智徳氏の活動を追ったドキュメンタリー。豪雨災害などが各地で頻発する昨今、造園家としてもキャリアを積んできた矢野氏が、被害に遭った土地に向いて植物や大地の再生に尽力する。監督・制作・撮影・編集を手掛けるのは前田せつ子。開発によって変わってしまった大地に息を吹き込み、止まってしまった自然の循環を正常に戻そうとする矢野氏の独特の手法が、深刻化する環境問題を浮き彫りにする。

[上映日程] 7/2~15
(休映：7/4、11)

舞台挨拶あり！

*7月2日(土)16時~の回の上映後と、7月3日(日)10時~の回の上映後、本作の前田せつ子監督と、造園家の赤尾和治さんによるアフタートークを実施します(赤尾氏は2日のみ参加)。



大地の呼吸を取り戻す

季節はずれの熱波・大雪・大洪水。世界の各地から異常気象のニュースが届く。一方で近年『人新世の「資本論」』という難解な本が、異例のヒットとなった。「人新世」とは、今の時代につけられた地質学上の名前で、その意味は「人間の活動の痕跡が地球の表面を覆いつくした年代」だという。よほど大胆な手を打たなければ、人類が地球を破壊しつくすであろう時代に、私たちは生きている。

そんな不安をくすぶらせている私たちの目の前に、映画『杜人』は驚くような風景を繰り広げてくれる。すっかり生気を失ったガジュマルの大木。造園家で環境再生医の矢野智徳は、木の周りの草むらに鎌をふるい、風の通り道を作る。小さな移植ゴテで水たまりの水を流す筋道を作る。それだけで、草木が風にそよぎ、水面に波紋が立ち、やがてガジュマルは息を吹き返す。

矢野は、大洪水に荒らされた土地、土砂崩れに見舞われた集落、コンクリートに囲まれて元気のない公園や寺などに出向いていく。重機を操り、シャベルや鋸を手に作業しながら、なぜそんな状態になったのか、どうすれば自然の営みを回復できるかを静かに語る。

この世の生物は、バクテリアも虫も鳥も獣も草木も、それぞれの役割を担って生態系を維持している。それなのに人間だけが、自分の役割を超えて自然に危害を加える。かつて人間は木々の声を聞き、無言の大地と対話しながら生きていた。それが今は経済効率一辺倒だ。大地をコンクリートで覆い、空気や水の流れを止めて大地を死なせてしまった。

矢野は長い時間を費やし、体を通して自然からさまざまなことを学んだ。作業現場で、彼は黙々とコンクリートを崩しU字溝に穴をあける。しかもその瓦礫さえも他所へ運び出さず、その場で何らかに利用する。その姿からは、人類の歴史を見通した深い思索が感じられる。この作品の隅々から私たちが学ぶことは山ほどありそうだ。

tamura shizue

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からハウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。